

[論文]

ポンバル研究序論

Uma Introdução para o Estudo Pombalino

疇谷 憲 洋

Kurotani Norihiro

大分県立芸術文化短期大学

研究紀要 第54巻

2017年3月

[論 文]

ポンバル研究序論

Uma Introdução para o Estudo Pombalino

疇 谷 憲 洋
Kurotani Norihiro

はじめに

ポンバリズモ (Pombalismo)

ポンバル侯爵、セバスティアン・ジョゼ・デ・カルヴァリョ・イ・メーロの統治を特徴づける政治的・経済的諸原理の総体であり、王権の強大化、国家と教育システムの世俗化・中央集権化、農業の発展、国の工業化、さらにはイギリスへの輸出の拡大を通じての国内経済の構築、といったものから構成されている。

(Academia das Ciências de Lisboa, *Dicionário da Língua Portuguesa Contemporânea*, II Volume, Verbo, 2001)

1750年から1770年のポルトガル・ジョゼ1世の治世、とりわけ1755年のリスボン大地震以降、国政の全権を掌握し、政治・経済・文化の多様な方面にわたり、後世「ポンバル改革」と総称される諸改革を行ったポンバル侯爵 (1699年~1782年) の政策とその原理は、人名であるポンバル (Pombal) の語尾に「-ismo」を付して「ポンバリズモ」という単語を生み出すことになった。人名の後に「-ismo」を付して作られた単語は、「フォンティズモ」「フランキズモ」「サラザリズモ」「カヴァキズモ」などが存在し、ポルトガル近・現代史において重要な役割を果たし後世に影響を与えた政治家の政策やイデオロギー的方向性などを含意している⁽¹⁾。2001年に刊行された『ポルトガル宗教史事典』にも「ポンバリズモ」という項目が立てられている。

オエイラス伯爵、後のポンバル侯爵である、セバスティアン・ジョゼ・デ・カルヴァリョ・イ・メーロによって、ポルトガルにおいては初めて、政治家の名が歴史にある種の統治形態を性格づけるものになった。統治の理論と実践の間の結びつきによって規定され、政治の特別な方向性を表現するのだが、そこでは、権力が、今そうであるものを統治するために行使されるのみならず、なによりも、あるべきものを構築するためにも行使されるのだ⁽²⁾。…。

このように、「ポンバリズモ」は、ポルトガル史上初めて、政治家の名前がある時代を表すだけでなく、ある種の統治形態を示す単語としても使用される例となった。それは、同時代の18世紀ヨーロッパ、とりわけ、中・東欧や南欧で実践された「啓蒙絶対主義」ないし「啓蒙専制主義」という用語と関連付けられており、他の「啓蒙専制君主」との比較という視点からも検討されている。1759年の追放令に端を発した反イエズス会政策が、全ヨーロッパ規模でのイエズス会追放につながり、1774年には教皇庁によってイエズス会の廃止が決定されたこと、さらに、この反イエズス会政策の一環として、積極的に反イエズス会プロパガンダを行ったこともあり、ポンバルは、ポルトガル国外においてもインパクトを与えた存在であった。そのことは、スペイン系イエズス会士グスタが著した『ポンバル侯爵言行録』が、ポンバルの統治を批判する一方で、フランスの文人コルマタンが『ポンバル侯爵の統治について』を著して、この『言行録』に反駁し、ポンバルの統治を称揚していることからもうかがえる⁽³⁾。

ポルトガル国内においても、ポンバルは評価の分かれる存在となった。ポンバルが権力の座にあった時期には、ポンバルへの賞賛が多くみられるが、1777年の失脚とともに、ポンバルを批判・風刺する文書が多数出現する。このことは、ポンバル政権の独裁的な性格に対する反発もさることながら、ポンバルの統治が、当時のポルトガル人に与えた衝撃の大きさを表しているともいえる⁽⁴⁾。そして19世紀においては、自由主義者・共和主義者と絶対王政派・伝統主義者とのイデオロギー的対立の中で、ポンバルの評価も分かれ、前者が自らの先駆者をポンバルに見出す一方で、後者は、伝統の破壊者であり、革命を導入するきっかけを作った存在としてポンバルに非難の言葉を浴びせる。こうした状況下で、それぞれのイデオロギー的願望を読みこんだポンバル像、いわゆる「ポンバル神話」が形成される⁽⁵⁾。

こうしたイデオロギー的バイアスのかかったポンバル像とは距離を置き、歴史学の研究成果に基づいてポンバル研究を行うことは、ポンバルの時代について検討するだけでなく、ポンバル期の27年が、その後のポルトガルの政治・経済・社会・文化にどのような影響を与えたか、ポルトガルの近代化の問題とも併せて検討するためにも必要とされている。

本稿では、ポンバルの統治の理念や実践の総体としての「ポンバリズモ」の研究の導入として、20世紀のポンバル研究の展開を大まかに抑えたい。今後の研究の方向性について考えてみたい。

1. 歴史研究の中のポンバル

19世紀後半から20世紀にかけては、ポルトガルにおける歴史学の発展と連動して、ポンバルについての「学問的アプローチ」も試みられる。その代表的なものが、『ポルトガル経済の時代区分』『ポルトガルの新キリスト教徒の歴史』などの著作がある João Lúcio de Azevedo の、『ポンバル侯爵とその時代(Marquês de Pombal e a sua Época)』である(1909年刊)⁽⁶⁾。この中で、Azevedoは、イデオロギー的評価から一定は距離を置きつつ、ポンバルの生涯と活動を再構築しようと試みた。

一次史料を用い、生い立ちから外交官時代の活動、宮廷における権力闘争から植民地政策、反イエズス会政策など、ポンバルの活動や政策のすべてを時代順に扱い、それまでの

英雄史観的なポンバル像からは一線を画しながら、「熱狂が収まり、そして議論の対象となったこの名前の上を何年もの間沈黙が覆っていた。後に沈黙は破れ、ポンバルは伝説の中に、権力の座にあった間に追従者が彼に奉った偉大さのすべての中に復活した。彼の性質は変形され、この陰気な暴君は自由主義のリーダーに姿を変えたのだ」と、独裁的な権力を振るったポンバルが自由主義者・共和主義者によって先駆者として半ば神格化されている矛盾を指摘している。しかしながら、ポンバル個人の資質や活動を重視している点ではそれまでのポンバル観を脱却したものではなかった。

それまでのポルトガル史研究及びポンバル研究を批判し、新たなポンバル研究の地平を切り開いたのが、経済史家 Jorge Borges de Macedo の『ポンバル時代の経済状況 (A Situação Económica do Tempo de Pombal)』(1951年刊)であった⁽⁷⁾。

「明白なことは、政治的プロセスはもはや歴史学の唯一の目的ではなく、もし、それらが、人間の生活の所産（政治的現象は、この人間の生活の所産のより表現的な形態に過ぎない）という現実的な基盤を実際に構築しているより本質的な出来事と結び付けられるのでなければ、適切な説明はないままになってしまうだろう」で始まる導入部においては、それまでの政治史・事件史・個人史中心であった歴史研究のあり方を批判し、社会環境や経済、生産手段についての研究の重要性を説くとともに、ポルトガル近代史における研究蓄積の少なさを指摘している。そして、ポンバル期の様々な出来事の原因がすべてポンバルに帰せられる中で「歴史家はほとんど、ポンバル派か反ポンバル派に分けることが出来るだろう。そして歴史学的というよりは政治的な闘争の中で、ポンバルには、告発的な攻撃か『弁護調書』的な賞賛が向けられていたのだ」と、それまでポンバルについて叙述してきた歴史家の党派性と、ポンバル個人の役割を過度に強調してきた傾向を批判したうえで、ポンバルの時代を前後の時代との連続性という観点から検討することを主張している。

そして Macedo は、ポンバル政権初期における、経済的繁栄と統治機構の弛緩（密輸の横行など）を指摘し、こうした状況を打破するためには国家権力の強化が必要であり、ポンバルは中央集権化を目指したのだが、「ポンバルの活動は革新的なものではなかった。というのも彼は、ポルトガル君主制において伝統的な方法を使いながら、同時に、伝統的な政治組織を使っていたのである。端的に言うなら、ポンバルにおける再構成とは、既存の組織の強化である」として、ポンバルの改革手法における新しさを否定する。

従来は、イギリスへの経済的従属からの脱却という文脈で捉えられてきた独占会社政策についても、通説を批判し、ポンバルのこの政策は、外国に対して自国の商人を保護し経済的な発展を目指したと言うより、むしろ、国内における流通統制や徴税機構としてのタバコ商人を始めとする少数の商業ブルジョワを保護し、かれらを商業評議会に登用してリスボンの経済界において指導的な役割につけるとともに、自らの権力基盤にしたのだと位置づけている。

また、ポンバルの功績として従来評価の高かった工業振興政策についても、18世紀のこの時期には内陸部を中心に、小規模で拡散的ではあるが手工業が存在し、地域の需要を満たしている一方で、沿岸部の大都市が、金や砂糖、タバコなどの植民地産品という支払手段により、イギリスを中心とする国外の工業製品・ぜいたく品を輸入していたのだが、金

の減産や植民地交易の不振という「危機」的な状況から、輸入品に対する支払い手段が減少したため、国内の工業生産への依存が強まり、ラト絹織物工場やコヴィリャン毛織物工場といった以前からあったものの強化・再編成を行っただけであるとして、ポンバルは、工業のないところから工業を振興したわけではなく、産業革命はポンバル以降の話であるということで、ポンバルの工業化政策に対する従来の評価に一定の留保を設けている。

このように、Macedo は、ポンバルの経済政策を、統計資料などを利用して、時代状況および、その前後の時代との連続性の中で位置づけ、それまでの個人的な資質や事件史的叙述に偏っていたポンバル研究に新たな局面をもたらした。そしてこの研究を出発点として、ポルトガル歴史辞典のポンバル関連の項目や、ポンバル没後200周年記念の際のパンフレットの執筆など、ポンバル研究者として重要な位置をしめることになる⁽⁸⁾。

ポンバルを論じる上で、とりわけ注目されているテーマが、1755年のリスボン大地震と復興・再建政策である。美術史家 José-Augusto França は、パリ大学に提出した博士論文を元に『啓蒙の都市－ポンバルのリスボン(Une ville des Lumières-La Lisbonne de Pombal)』をフランスで公刊した(1965年刊)⁽⁹⁾。後にポルトガル語版『リスボア・ポンバリーナと啓蒙主義』が出版され版を重ねるが⁽¹⁰⁾、この書の中で、França は、地震によって壊滅した首都リスボンの再建が、耐震性・防火性にも配慮しつつ、格子状の街区を持ち規格化されたプランで行われ、リスボンを「啓蒙の都市」というべき近代都市に変貌せしめたことと、ポンバル時代の社会的・文化的変化を連動させて理解し、合理的で簡素な「ポンバル様式(Estilo Pombalino)」と呼ばれる芸術的傾向が成立したことを論じている。この書は、1755年の震災と復興事業を中心に、18世紀の文化・社会・芸術を幅広く論じていることから、18世紀ポルトガル研究の基本文献となっている。

また、後に出版された『ポルトガル芸術史』というシリーズの中で、França は第5巻「ポンバリズムとロマン主義」を担当し、ポンバルの時代を、ポルトガル芸術史において、バロック期とロマン主義の間の時代として位置づけている⁽¹¹⁾。

また、英語圏におけるポンバル研究者として重要な存在が、『対立と陰謀 - 1750～1808年のブラジルとポルトガル (Conflicts & Conspiracies Brazil and Portugal, 1750-1808)』や『ポルトガル民主主義の創造 (The Making of Portuguese Democracy)』などの著作のある Kenneth R. Maxwell である。かれは1968年の論文「ポルトガル・ブラジル経済の国有化とポンバル」の中で、18世紀前半のポルトガル・ブラジル交易の展開の中にイギリス資本が入り込み、ブラジルの金がイギリスに流失している状況を説明した上で、植民地ブラジルに対するポンバルの政策を、イギリスとの通商を排除するものではなく、相互主義を達成するためのものであると位置づけ、ポルトガル・ブラジル経済の「国有化」を目指した植民地交易・開発への国家の介入が、イギリス資本を元に活動していた「巡回商人(comissários volantes)」や、アマゾン河流域に多数の布教団を有していたイエズス会との対立・排除を招き、ポンバルの様々な政策の要因となったことを論じている⁽¹²⁾。その後、1990年に出版された H.M. Scott 編の論集『啓蒙絶対主義 - 18世紀後半のヨーロッパにおける改革と改革者 -』所収の「ポンバル、啓蒙と専制の逆説」においては、当時のポルトガルの経済的・文化的「後進性」が、啓蒙主義と専制支配という、本来相いれないものが結びつくと言う事態を可能にしたのだと論じている⁽¹³⁾。この論考は、後にポンバル

の生涯と政策の全体像を描く『ポンバルー啓蒙の逆説(Paradox of the Enlightenment)』に発展したが、ブラジルとポルトガルそれぞれでポルトガル語版が出版され、ポンバルの生涯と全体像を知る基本文献の一つとなっている⁽¹⁴⁾。

以上、20世紀後半には、歴史研究の進展を踏まえてのポンバル研究が本格化し、このほかにも教育改革や植民地交易など、ポンバルを巡る様々なテーマが研究対象となるのだが、それが最もよく現れたのが、1982年の「ポンバル没後200周年」であった。

2. 1982年と「ポンバル論集」

1982年はポンバルが所領のポンバルの館で没して200年になる。この年は、全体主義体制と植民地支配に終わりを告げた1974年の民主化革命に伴う混乱が一段落し、1986年のEU加盟に向かう時代の中で、民主化とヨーロッパ化、そして経済の立て直しが模索された時期であった。

都市リスボンの歴史と1755年の震災・復興の展示で有名なリスボン市博物館は、1982年11月10日から12月31日にかけて「ポンバル侯爵没後200周年記念展」を開催している。展示カタログは3巻で構成されており、第1巻はポンバルとかれを巡る同時代の人物たちの肖像画やメダイオン、第2巻は同時代のリスボンを描いた絵画やリスボン再建のプラン、第3巻は調度品や装飾タイルなどの工芸品、というように、リスボン復興事業に重点を置きながら、ポンバルとその時代を理解する上で有益な展示であったことがうかがわれる⁽¹⁵⁾。

また、ポンバル没後200周年記念事業のための組織委員会が立ち上げられ、様々な記念事業を行うことになるのだが、その後援の下「ポンバルコレクション」という文書群を有する国立図書館は、『ポンバル侯爵—文献・図像カタログ—(Marquês de Pombal, Catálogo Bibliográfico e Iconográfico)』を刊行した。このカタログは、ポンバルの書簡などの手稿を始め、同時代の出版物や、法令集、図像などの膨大な資料を網羅し、ポンバル期の研究者にとって不可欠な文献となっている⁽¹⁶⁾。

ポンバル没後200年を記念する様々な行事や出版事業の中で、後のポンバル研究にとって重要な位置をしめているものが、いくつかの「論集」の発刊である。1982年12月2日、3日には、前出のポンバル没後200周年記念事業の組織委員会によって国際学会が行われた。その時の報告を論集として出版したものが、2巻からなる『ポンバル再訪(Pombal Revisitado)』である⁽¹⁷⁾。表①は、その目次であるが、政治・経済・文化・宗教と、多様な分野においてポンバルとその時代が考察の対象となっているのが分かる。

表①：論集『ポンバル再訪(Pombal Revisitado)』目次

<p>第1巻 ~開会の部~ 「ポンバルを記念して」(Raúl Rêgo) 「ポンバル期のブルジョワジー、マリア1世期の貴族、そして自由主義貴族」 (José-Augusto França)</p>
--

～ポンバルのその後～

「ブラジルにおけるポンバル改革とマリア1世期における継続：ルイス・ドス・サントス・ヴィリエーナ、ポルトガル - ブラジルにおける政治思想の里程」

(Leopoldo José Collor Jobim)

「ポルトガルのフリーメイソンの伝統におけるポンバル」

(A. H. Oliveira Marques, João José Alves Dias)

「ポンバルとフリーメイソン」(José A. Ferrer Benimeli, スペイン語)

「ポンバル侯爵と演劇」(Luiz Francisco Rebello)

「権力・知識人・反権力」(Maria Helena Carvalho dos Santos)

「伝統主義的・カトリック的イデオロギーにとってのポンバル」

(Luís Manuel Soares dos Reis Torgal)

「ポンバルとオリヴェイラ・マルティンス」(Eduardo Lourenço)

～教育改革～

「新たな言説のための新たな修辞学」(Maria Leonor Buescu)

「ポンバルの教育改革における初等教育についての覚書」(António Cruz)

「医学教育についてのポンバル改革」(Miller Guerra)

「1772年 - コインブラ大学についてのポンバル改革のいくつかの局面」

(Manuel Augusto Rodrigues)

「ポンバル侯爵とブラジルにおける教育」(António Alberto Banha de Andrade)

～社会構造と対外政策～

「1757のポルトの暴動」(F. Ribeiro da Silva)

「『ポンバル侯爵言行録』と啓蒙期スペインにおける受容」(Lucienne Domergue, フランス語)

「ポンバル侯爵、新キリスト教徒、異端審問」(Raúl Rêgo)

「ポンバル侯爵の家族と異端審問所」(Maria Tereza Sena)

「ポンバルのために働いた反イエズス会士：アベ・プラテル」(Claude Michaud, フランス語)

「ポルトガル旧体制におけるポンバル期の法令と家族構造」(Maria Beatriz Nizza da Silva)

「オーストリア・ウィーンの宮廷におけるセバスティアン・ジョゼ・デ・カルヴァリオ・イ・メーロの外交活動(1744～1749)」(Maria Alcina R. C. Afonso dos Santos)

第2巻

～経済・商業・工業～

「18世紀ポルトガルにおける工業の発展と技術的遅れ」(António José da Silva Moreira)

「ポンバル侯爵とガラス産業」(Fanny Andrée Font Xavier da Cunha)

「リスボン造幣局のためのポンバル侯爵の新規約とルイス・ゴンザーガ・ダ・コスタの

『金銀貨幣鑄造規則論』 (Agostinho Ferreira Gambetta)

～都市の理想と実現化～

「ボンバル侯爵によって5か月で竣工したヴィラ・レアル・デ・サント・アントニオ」
(José Eduardo Horta Correia)

「ボンバルのイコノグラフィーと非イコノグラフィー」 (José-Augusto França)

「ボンバル侯爵の時代のポルトにおける芸術」 (Flávio Gonçalves)

「ボンバル期の都市ユートピア：ジョゼ・デ・フィゲイレード・セイシャス『街路についての論考』」 (Rafael de Faria Domingues Moreira)

「ジョヴァンニ・カラファ・ドゥッカ・ディ・ノージャの批判的啓蒙主義とヴィチェンツォ・ルッフォのユートピア」 (Cesare de Seta, イタリア語)

「オエイラスにおける侯爵の邸宅と庭園 (ボンバル時代の芸術についての覚書)」 (José Meco)

～芸術・文学・思想～

「コルデル文学のコレクションにおける1755年の地震」 (Eduardo Mayone Dias)

「王立検閲委員会によって不可とされたモリエールのボンバル期版」 (António Coimbra Martins)

「18世紀前半における反体制」 (Graça Almeida Rodrigues)

「ボンバル侯爵の時代の演劇：娯楽と権力」 (José da Costa Miranda)

「18世紀におけるポルトガル音楽の (学際的な) 人類学的パースペクティブのために」
(Manuel Cadafaz de Matos)

「ボンバル侯爵の陰で - ポルトガル・アフリカ・ブラジル性の偉大な演劇」 (Mário António de Oliveira)

～閉会の部～

「学際的研究組織のために：国際18世紀研究協会」 (Roland Desné, フランス語)

「ボンバル再訪」 (Joel Serrão)

当時のポルトガル大統領や文化大臣も立ち会った開会の辞で、組織委員長の文筆家・ジャーナリストのRaúl Rêgoは、ボンバルの人物像は未だ論争の対象になっていることを認めたくえで、自由主義者や共和主義者が1882年のボンバル没100周年を祝ったことに言及し、「(ボンバルは) 自由主義者でもなく、同じく民主主義者でもなかったが、しかしかれの改革は、ポルトガル自由主義の基盤になっているのである」と言明している。また「かれの時代には、ポルトガルのヨーロッパ化が課題になっていた」と、対抗宗教改革以来ピレネー以北のヨーロッパと断絶していたポルトガルが再びそれらとつながった時期であると捉え、そして「ボンバル統治のすべてからの偉大な教訓は、一つの国民の調和、そして諸国民間の調和であるように思われる」と、新キリスト教徒 (改宗ユダヤ人) 差別撤廃政策を引き合いに、国民統合と国際社会への復帰という当時のポルトガルの課題の中で、その先駆者としてボンバルを位置づけている。

このように、Raúl Rêgo の開会の辞からは、1982年の時代状況とリンクさせて、ボンバ

ルを肯定的に評価しようとする意図が明らかである。

こうした、記念事業組織委員会による国際学会の開催・報告集の刊行の一方で、学術雑誌がポンバルについての特集を組んだ例もある。雑誌『ブロテリア (Brotéria)』は2回に分けて、「ポンバル侯爵没200周年において (No Bicentenário do Marquês de Pombal)」という特集を組んでいる⁽¹⁸⁾。論考は表②の通りである。

表②：『ブロテリア - 文化と情報 - 』 「ポンバル侯爵没200周年において」 目次

(I)、1982年5月・6月号

- 「ポンバルをどのように解釈するか？」 (Manuel Antunes)
- 「ポンバルのイデオロギー。啓蒙専制主義とレガリズム」 (António Leite)
- 「ポンバルの対外政策」 (Eduardo Brazão)
- 「ポンバルと大学改革」 (Joaquim Ferreira Gomes)
- 「コインブラ大学神学部とポンバル改革」 (Manuel Augusto Rodrigues)
- 「ポンバルの時代の精密科学」 (Rómulo de Carvalho)
- 「ポンバルと中等教育」 (António Leite)

(II)、1982年8月・9月・10月号

- 「ポンバル侯爵とイエズス会士」 (Manuel Antunes)
- 「法学論争とポンバル的解決」 (Mário Júlio de Aimeida Costa)
- 「ポンバルの異端審問」 (Luís A. de Oliveira Ramos)
- 「ポンバリズムとメディア文化。王立検閲委員会を通じての調査の手段」 (Maria Adelaide Salvador Marques)
- 「ポンバルとダイヤモンド問題」 (Eduardo Gonçalves Rodrigues)
- 「アマゾン河空間における都市形成のポンバル戦略」 (Manuel Nunes Dias)

その巻頭論文「ポンバルをどのように解釈するか」の中で、António Leite は、タキトゥスの「憤激なく偏頗なく (sine ira et studio)」というフレーズを引き合いに、没後200周年という機会に、「ポンバル化 (Pombalização)」 = 「民主化 (Democratização)」などといった具合にポンバルを過度に賞賛することを批判した上で、ポンバルの気質については「激烈でせっかちで、残酷で恨みがましく、野心に苛まれ詭弁家で、高慢で卑屈で、計算高くで愛想よく、…」といった形容詞を並べて言及し、「大量殺戮者」としての側面や、ポルトガルの「プロテスタント化」など、イエズス会の迫害やローマ教皇庁との対立などの側面から、ポンバルを否定的に評価しようという意図が明確に見て取れるものとなっている。この『ブロテリア』の特集号は、明らかに前出の記念事業や国際会議を念頭に置いたものであり、没後200年経てもポンバルを巡るイデオロギー的対立が続いていることがうかがえる。なお、この特集号は、後に、Jorge Borges de Macedo の論考「ポンバル時代のポルトガル社会についての対話」を加え、『ポンバルをどのように解釈するか? (Como Interpretar Pombal)』という1冊本に再編集され、発刊されている⁽¹⁹⁾。

また、コインブラ大学文学部の「思想史・理論研究所 (Instituto de História e Teoria das Ideias)」が発行している研究年報『思想史研究』も、この機会に「ポンバル侯爵とその時代 (O Marquês de Pombal e o seu Tempo)」というポンバル研究の特集号を組んでいる⁽²⁰⁾。以下はその目次である。

表③：『思想史研究』特集号「ポンバル侯爵とその時代」論考題目一覧

第1巻

- 「導入のための覚書：ポンバリズモの意義について」(Luís Reis Torgal)
- 「セバ스티アン・ジョゼ・デ・カルヴァリョ・イ・メーロのウィーンにおける外交官時代(1744-1749)のオーストリアの改革についての簡潔な覚書」(Ludwig Scheidl)
- 「オーストリア・ウィーンにおけるセバ스티アン・ジョゼ・デ・カルヴァリョ・イ・メーロの公的活動(1744-1749)」(Maria Alcina Afonso dos Santos)
- 「ポンバル侯爵の経済政策と18世紀ポルトガル社会」(Armando de Castro)
- 「権力と社会。ポンバルの法令と旧ポルトガル社会」(António Resende de Oliveira)
- 「ポンバル時代における外国人のリクルート」(Rómulo de Carvalho)
- 「リベイロ・サンシェスとユダヤ人問題」(Maria Helena Carvalho dos Santos)
- 「18世紀後半のポルトガルにおける女性の状況」(José Gentil da Silva)
- 「アントニオ・ペレイラ・デ・フィゲイレード、ポンバル、『啓蒙』」(Cândido dos Santos)
- 「ポンバルとコインブラ司教ミゲル・ダ・アムンシアサン」(Manuel Augusto Rodrigues)
- 「ポンバルとイエズス会。パンフレット攻撃」(Claude-Henri Frêches, フランス語)
- 「ポンバルとイエズス会士」(Eduardo Brazão)
- 「1761年のアウト・ダ・フェ」(Isaías da Rosa Pereira)
- 「ポンバル期における君主教育」(Maria Beatriz Nizza da Silva)
- 「偽ってポンバル侯爵のものとした『政治的言説』」(José Barreto)

第2巻

- 「ポンバルと教育：『エストウドス・メノーレス』改革についての覚書」(Jacques Marcadé, フランス語)
- 「ポンバル侯爵、公的初等教育の創設者：ポンバル期とマリア1世期の二つの教員リスト」(J. Ferreira Gomes)
- 「大学改革とそれを企画した二人のブラジル人」(Pedro Calmon)
- 「ポンバル改革と歴史の補助学問」(António Cruz)
- 「ポンバルと修道院における学問の改革。ベネディクト修道会の場合」(Luís A. de Oliveira)
- 「ポンバル改革のギリシア語試験プログラム」(Américo da Costa Ramalho)
- 「大学出版局の文書について。ポンバル改革のイデオロギー的方向性についての覚書」(José Antunes)

「『愚者の王国』の知られざるヴァージョンについて」(Ofélia Paiva Monteiro)
「『フィレーノへの頌歌』と1772年の大学改革」(Isabel Nobre Vargues)
「ポンバル侯爵とその都市についての覚書」(José-Augusto França)
「ポンバルとモリエール」(António Coimbra Martins)
「ロンギノスとクストディオ・ジョゼ・デ・オリヴェイラ：18世紀修辞学についての覚書」
(Maria Leonor Buescu)
「ポンバル時代の音楽」(Francisco Faria)
「スペインにおけるポンバル期文化のイメージ」(Marie Hélène Piwnik, フランス語)
「ポンバル没後100周年(1882年)。歴史的解釈のための試論」(Rui Bebiano)
「とある栄光の有為転変」(Andrée Rocha)
「啓蒙と世俗化」(Miguel Baptista Pereira)

この特集号の編者でもある Luís Reis Torgal は、論考「導入のための覚書：ポンバリズモの意義について」を、「ポンバル没後 200周年について『思想史研究』があてているこの書を繙くことは、まさにこう問う機会である。…ポンバルの活動が、ポルトガルの歴史において意味しているものは何であり、ヨーロッパの文脈への当てはめの限界は何だろうか？…あるいは、もし、ジョゼ I 世の大臣（ポンバル）の活動が、一貫性があつたりなかつたりする何かとともに、ある運動の方向性を持っていたならば、(少くより論争的ではあるが) 更に意味深長な違う形の間をたてることが出来るだろう—実際には、『ポンバリズモ』とは何であったのだろうか？」という問いかけから始め、ポンバルを取り巻くイデオロギー的対立について整理し、「啓蒙主義」や「啓蒙絶対主義」といったポンバル期を表現するときに使用される用語の定義の難しさや、ポンバルにそれを当てはめる際の問題点について論じ、ポンバリズモの意義を考えるためには、学問的な歴史研究が必要であることを述べている。この論考からは、ポンバルを巡るイデオロギー的対立から離れてポンバルを研究することの必要性と、「ポンバリズモ」研究への方向性が見て取れ、とりわけ思想的アプローチにおけるポンバル研究の出発点の一つとなっている。

このように、ポンバル没後200周年にあたる1982年には、様々な記念事業が行われる一方で、ポンバルについての研究論集が複数発刊され、この時代への関心の高さとポンバル研究の広がりを確認することが出来る。そして、この「ポンバル論集」という形態は、1999年の「ポンバル生誕300年記念」など、その後も何度か企画され、ポンバル研究の重要性や関心の高さと広がり示している⁽²¹⁾。

おわりに

以上、1982年までの代表的なものを中心に、ポンバル研究の流れを簡潔に見てきたが、今後のポンバル研究を進めていく際の方向性として重要な「ポンバリズモ」論の射程について触れておきたい。

ポンバリズモを中心的なテーマとして本格的に論じたのが、『ポルトガルとヨーロッパ文化(16世紀～18世紀)』で有名な思想史家 José Sebastião da Silva Dias である。1982年に

発表した論考「ポンバリズモと政治理論 (Pombalismo e Teoria Política)」では、「理論的には、啓蒙絶対主義は、それ自身ポンバリズモのそれと終始同一であったというわけではない。また、最初から形成されていたものでもない。それは、徐々に巻き込まれてゆく確固とした闘争の要請に従って、少しずつ形成された」として、以下、ペレイラ・デ・フィゲイレードらの「王権優位説(Regalismo)」や、反イエズス会文書『年代記的演繹による推論の書』における絶対主義、ポルトガルにおける自然権思想の導入、1772年の大学改革の際の新規約の位置付けなど、様々なテキストの読解を通して、ポンバル期における政治理論の形成と展開を論じ、ポルトガル政治思想史上におけるポンバリズモの位置付けを図っている⁽²²⁾。

また、1982年と1983年の2回に分けて発表され、後に1冊本にまとめられた「ポンバリズモと政治的企図(Pombalismo e Projecto Político)」においては、政治理論と政治的実践の関係性の多様性・複雑さや、考察する際の単純化や抽象化の危険性を指摘した上で、19世紀の Luz Soriano から20世紀の Fortunato de Almeida、Lúcio de Azevedo、Borges de Macedo にいたるまでの歴史家が、政権の座に就く前に、ポンバルがなんらかの政治的企図を心に抱いていたことを否定したり、そうした問題について無視していた態度を批判している。

その一方で、それまでポンバルの政治的企図を表すものとして引用されてきたパンフレット『ポルトガルが現在の不幸から引き出せる利益についての政治的論考』について、その真の著者はフランスの文筆家アンジュ・グダールであり、1755年のリスボン地震という機会を捉えて、ポルトガルをイギリスから引き離しフランスとの同盟関係を構築しようという世論を喚起するための作品であると位置づけ、この『政治的論考』の反イギリス的思考が、ポンバルの政治的企図と反していることを確認したうえで、ポンバルにおける政治的企図の形成を、かれが政権に就く前に、ロンドンやウィーンでの外交官時代に本国に送った書簡や提案書（この時点ではほとんどが未公刊）を多数引用しながら、イギリスとの関係の再確認や問題点の認識、通称会社の設立や手工業の振興の重要性、さらには、ヨーロッパ情勢の認識や、教会と国家の関係の見直しなど、後のポンバル改革につながる政治的企図の発現を論じ、「ポンバルは、権力の座に上った時に、多様で深みのある政治的企図を自ら携えていたのであった。既存の『現状』についてのオルタナティブな政治的企図—多くのものが望んだように、変化の企図だったのである」と結論付け、ポンバルの政治的企図の存在を確認している⁽²³⁾。

ところで、この「ポンバリズモと政治的企図」の冒頭、1ページ目の欄外には、この論文に続くものとして、「ポンバリズモと政治的実践」「ポンバリズモと植民地政策」「ポンバリズモと経済政策」「ポンバリズモと文化政策」の4つの論考の表題が書かれている。Silva Dias が、「ポンバリズモと政治的企図」を皮切りに、総合的なポンバル研究を企図していたことがうかがえる。しかしながら、これらの論考は結局発表されないまま今日に至っている。

もしこうした論考が実際に発表されていれば、その後のポンバル研究がどのように展開し、深化したのか想像すべくもないが、今後の課題として、冒頭に引用した宗教史事典の「ポンバリズモ」の論考や、Luís Reis Torgal、José Vicente Ferrão らのポンバリズモに関する論考を再検討し⁽²⁴⁾、ポンバル研究の方向性を考えていきたい。

〔注〕

- (1)「フォンティズモ(fontismo)」は、19世紀後半に社会資本の整備と近代化を推進した公共事業大臣フォンテス・ペレイラ・デ・メロ、「フランキズモ(franquismo)」は20世紀初頭の王政の危機の時代に独裁的な権力を振るったジョアン・フランコ、「サラザリズモ(salazarismo)」は1933年から1974年の「新国家」体制期の独裁者アントニオ・デ・オリヴェイラ・サラザール、「カヴァキズモ(cavaquismo)」は、1990年代にEUからの資金導入と構造改革で経済成長を達成したアニバル・カヴァコ・シルヴァ首相（後に大統領）にそれぞれ由来している。
- (2)Castro, Zília Osório de, “Pombalismo”, in *Dicionário Religiosa de Portugal*, J-P, Círculo de Leitores, 2001, pp.462-464.
- (3)Cormatin, Pierre de, *A Administração do Marquês de Pombal*, Bonecos Reveldes, 2010.
- (4)Santos, J.J. Carvalhão, *Literatura e Política-Pombalismo e Antipombalismo*, Livraria Minerva, 1991.
- (5)Freund, Thomas, “Mitos Pombalinos na Literatura Portuguesa -resumo-“, in Idem, *Pombalmythen in der portugiesischen Literatur*, Gabriele Klein Verlag, 1988.
- (6)Azevedo, J. Lúcio de, *O Marquês de Pombal e a sua Época*, Clássica Editora, 1990(2.^a edição).
- (7) Macedo, Jorge Borges de, *A Situação Económica do Tempo de Pombal*, Livraria Portugália, 1951.
- (8)Idem, “Pombal, Marquês de (1699.1782)”, in *Dicionário de História de Portugal*, V, Livraria Figueirinhas, 1989, pp.113-121, Idem, *O Marquês de Pombal (1699-1782,)*, Biblioteca Nacional, 1982.
- (9)França, José-Augusto, *Une ville des Lumières, La Lisbonne de Pombal*, S. E. V. P. E. N, 1965.
- (10)Idem, *Lisboa Pombalina e o Iluminismo*, Bertrand Editora, 1987.
- (11)Idem, *O Pombalismo e o Romantismo (História da Arte em Portugal, 5)*, Editorial Presença, 2004.
- (12)Maxwell, Kenneth, “Pombal and the Nationlization of the Luso-Brazilian Economy”, in *HAHR* 47, 1968, pp.608-631.
- (13)Idem, “Pombal: the Paradox of Enlightenment and Despotism”, in Scott, H. M. (Edited by), *Enlightened Absolutism, Reform and Reformers in Later Eighteenth-Century Europe*, Macmillan, 1990, pp.75-118.
- (14) Idem, *Pombal, Paradox of the Enlightenment*, Cambridge University Press, 1995. Idem, *Marquês de Pombal, Paradoxo do Iluminismo*, Paz e Terra (Rio de Janeiro), 1996. Idem, *O Marquês de Pombal*, Editorial Presença(Lisboa),2001.
- (15)Museu da Cidade, *Exposição: Lisboa e o Marquês de Pombal*, 1,2,3, s.d.
- (16)*Marquês de Pombal, Catálogo Bibliográfico e Iconográfico*, Biblioteca Nacional, 1982.
- (17)Santos, Maria Helena Carvalho dos (coord.), *Pombal Revisitado*, Vol.I, II, Editorial Estampa, 1984.

- (18) *Brotéria Cultura e Informação*, vol. 114- N.o 5-6, 1982 (Maio-Junho), e vol.115- N.o 2-3-4, 1982(Agosto-Setembro)
- (19) AA.VV. *Como Interpretar Pombal?*, Edições Brotéria, 1983.
- (20) Torgal, Luís Reis, e Vargues, Isabel (coord.), *O Marquês de Pombal e o seu Tempo (Revista de História das Ideias, IV)*, Tomo I, e II, Universidade de Coimbra, 1982-83.
- (21) AA.VV. *Actas: Congresso O Marquês de Pombal e A sua Época/Colóquio O Século XVIII e o Marquês de Pombal*, s.d. Araújo, Ana Cristina (coord.), *O Marquês de Pombal e a Universidade*, Imprensa da Universidade, 2000. AA.VV. “Marquês de Pombal”, *Camões, Revista de Letras e Culturas Lusófonas*, 15-16, 2003(Janeiro-Junho). Silva Pereira da (coord.), *Pombal e o seu Tempo*, Caleidoscópico, 2010.
- (22) Dias, José Sebastião da Silva, “Pombalismo e teoria política”, in *Cultura, História, Filosofia*, 1, 1982, pp. 45-114.
- (23) Idem, “Pombalismo e projecto político”, in *Cultura, História, Filosofia*, 2, 1983, pp. 185-318; 3, 1984, pp. 27-151.
- (24) Torgal, Luís Reis, “Acerca do Significado Político do Pombalismo” in *Munda*, n.o 4, Novembro, 1982, pp.18-29. Serrão, José Vocente, “Sistema político e funcionamento institucional no Pombalismo, in AA.VV. *Do Antigo Regime ao Liberalismo, 1750-1850*, Documenta Histórica, s.d.